

20 世紀心理学の死生観——フロイトからキューブラー＝ロスまで

堀江宗正 (聖心女子大学)

本講義の目的は、死と生をめぐる心理学的な思想を整理し、論点を確認することである。心理学的死生観は、ニヒリズム的死生観と宗教的死生観のどちらをも批判し、死の直視と生の意味と価値の認識を同時に達成し、個人にとっての死と死後生のイメージを心理学的な観点から記述し、また構築するものである。それは現代人の死生観として有力な選択肢と言える。他方、それと連続しつつも区別されるスピリチュアルな死生観 (個人主義的な死後生の肯定) も、死に直面する期間が長期化した現代においては可能な選択肢としてあることを示す。

本講義で、研究の対象となるのは、心理学的な立場から宗教を対象化し、それを通じて宗教に代替するような思想を練り上げ、かつ死をめぐる心理的問題に言及している著者たちである。具体名としては、フロイト、ユング、フランクル、キューブラー＝ロスなどである。

フロイトの「喪の仕事」と「死の欲動」をめぐる議論からは、次のような死生観を読み取ることができる。生は死をはらむ。生は喪失の連続であり、無常である。しかし、だからといって生が無意味だということではない。生は永遠ではないからこそ意味がある。臨床的には、死を否認すると抑鬱などの症状に陥ることが観察される。悲しむこと (喪の仕事) はかえって対象の価値の認識につながる。

ユングにおいて「死と再生」とイメージされるような個性化・自己実現をめぐる議論と、彼自身の臨死体験をめぐる発言からは、次のような死生観を読み取ることができる。生は個性化・自己実現のプロセスであり、心的現実としては死と再生の繰り返しである。その最後に訪れる死は、したがって生の達成であり、個性化の最終段階と言える。死は、個人の意識が、人類の集合的無意識に帰することとも言える。ユングは臨死体験を持ち、死後生の実在を匂わすが、最終的には死後生を心的現実として扱うという態度を崩さない。臨床的には、死を無とすると、死への不安や恐怖が高まる。死と再生の宗教的・神話的イメージの助けを借りながら死に向かう必要があるとされる。

フランクルの強制収容所体験をめぐる叙述、生きる意味に関する議論からは、次のような死生観を読み取ることができる。収容所では、なぜ生きるのかを問い、生きる意味を見いだせないものは絶望し、死んでいく。生きていく意欲を見いだすことができたのは、未来の自分から見て以下にいきべきかを認識できたものである。つまり、われわれは、生の意味を問うのではなく、問われているのであり、生きる意味を示す責任がある。生とは、生成であり、何かになると同時にそれが沈殿し、生きた意味となる。この観点からすれば、死は生の完成であり、死後には精神的 [靈的] 人格が残る。しかし、それは死後生とは区別される。なぜなら精神的なものは、物理的なものとは無関係だからである。このような死があるからこそ生の一瞬一瞬がかけがえのないものとなる。

以上の主張、また各論者のその他の発言を踏まえるならば、心理学的死生観は次のような特徴を持つと言える。生には、死に向かう傾向性があり、死は生の完成であり、死者の人格的イメージは心的現実として残る。自我はエロス・無意識・精神などといったそれを成り立たせている大いなる

1.2 死生学ピック

ものの自己展開の運動のなかから生まれ、そこに帰る。したがって、死は個人的自我にとって現実的だが、生はそれを超えた意味と価値を持つ。このような心理学的死生観は、ニヒリズムと宗教のあいだを揺れ動く現代人にとって一つの有力な死生観と言える。上述の三人の意見をまとめると、ニヒリズム的死生観は、死ねば無とし、生を無意味・無価値とし、宗教的死生観は、死後生を肯定し、死を否認する。それに対して、心理学的死生観は、死を直視してなお生の意味や価値を認めようとするものである。また、それは臨床的には、死と死後生に関するイメージの形成を援助することで、死にまつわる悲しみ・不安・恐怖を癒すものである。

第二次世界大戦後には、心理学的死生観は新たな展開を見せる。医療の高度化と死期の延長（高齢化）が進むことで、人は日常から隔離された病院で死を迎え、医者は延命を第一として、死を敗北とし、患者を死について話すことを避けるようになる。それによって、死を受容するか、それとも否認するかという心理的葛藤が問題として浮上する。

キューブラー＝ロスは出世作である『死とその過程について』で、死にゆく過程を、否認・孤立、怒り、取り引き、抑鬱、受容の五段階にわけて記述した。私は後にも指摘するように、否認と受容は明確に分けにくいと考え、この五段階は、否認と受容のブレンドとして理解することができると考えている。このような視点からすれば、この理論の眼目は、否認と受容の葛藤の分節化にあると考えられる。なお、この時点では、キューブラー＝ロスは、フロイトと同様、宗教的信仰は、否認の一種であると考えている。私はこれまでの研究で、キューブラー＝ロスだけでなく、エリクソンやヒルマンの老年期に関する議論を踏まえて、戦後の心理学的死生観の特徴は、老化や、死への直面に伴う、負の心理的側面や葛藤を問題として把握し、心理学的に理解しようとするが、結論的には、死に向かう心理を「最後の成長」としてとらえる傾向があると考えている。「健康/病的」「成長/停滞」などといった生の領域に属する用語で、「やがて死ぬだけ」の生を、意味や価値があると見て救い出そうとするのである。

しかしながら、このような心理学的死生観は、ある限界を持っている。たしかに、心理学的死生観は、「死後生」の存否には関与しないという不可知論的前提によって、宗教的信仰もニヒリズムも全面受容できないような類いの現代人に魅力ある死生観を提示したと言える。しかし、医学の進歩による、死に直面する時期と葛藤の遷延は、不可知論的立場を危うくするのではないだろうか。その結果、個人化した「死後生」信仰への需要は高まるのではないだろうか。しかしながら、死後生を實在論的に認めたとき、それは心理学的不可知論の立場、つまり心理学的死生観の臨界点を超えて、宗教的實在論に一步踏み込むことになる。

このような見通しの一つの例として、キューブラー＝ロスのその後の死後生肯定への「回心」を検討したい。キューブラー＝ロスの死後生肯定の背景には、第一に「否認と受容のパラドクス」、つまり否認は受容の一種であり、受容は否認の一種であり、両者は形式的に決定できないということがある。第二は、「真正性の倫理」、つまり否認か受容かは、死後生観念の有無ではなく、感情の欺瞞や隠蔽の有無で決まるという考えである。第三は、近代以前には死にゆく者は孤独でなく、死の否認や隔離はなかったという前提にもとづく「看取りと分かち合いの共同体の再構築」である。

前出の『死とその過程について』は冒頭から、宗教的信仰は死の否認だという断定が目立つ。しかし、これは事例では裏付けられていないように思われる。本論中のインタビューにおいてキューブラー＝ロスは、「信仰があるから大丈夫」と言う患者に「本当に不安や恐怖がないか」問いただすような懐疑的姿勢を見せている。そして、それでも揺るがない患者を前に黙りがちになり、そこを共同研究者のチャプレンがフォローするという場面がいくつか見られる。このことから、自己欺瞞

的でない信仰なら問題ないという真正性の倫理に落ち着いていることが推測される。

また、彼女のセミナーにおける共同研究では、宗教的伝統が、死を受容する共同体として評価されている。そして、現代社会ではそれが壊れているという認識が示されている。患者の死と患者そのものを受容するというキューブラー＝ロスの治療実践は、死を受容する共同体の再構築としてとらえられるだろう。かくして、宗教は、死を否認するだけでなく、死を受容する受け皿にもなる。

彼女が死後生肯定に転じる直接の決定的契機は、自伝にも見られるように、患者による臨死体験とキューブラー＝ロス自身の数々の宗教体験である。そこでは、患者の臨死体験の報告を受容することが死後生の肯定への「回心」に結びついており、死後生を認めようとしないう頑迷な態度は、死後生の「否認」としてとらえられている。

こうして、彼女が到達した死後生肯定の立場は、「スピリチュアルな死生観」呼ぶことができるかもしれない。スピリチュアルな死生観とは、死後生に関する不可知論から実在論へと転換しているものの、いわゆる宗教的死生観と異なり、死生観を強要することなく、個人の内的確信の立場を貫くようなものである。これは、死後生をイメージとしてのみ活用するという態度の困難さ、とくに死に直面する時期の延長に伴う困難さの増大によって要請されるものだと考えられる。それを「スピリチュアル」と呼ぶのは、霊＝スピリットを中心概念とするという意味と、教条主義に反対する個人的スピリチュアリティの立場に近いという点による。

心理学的死生観は、宗教的死生観（ここではキリスト教）もニヒリズム的死生観も全肯定できないような現代人にとって、死を直視しつつ生の意味や価値を認め死と死後生のイメージを提供するものとしてアピールするであろう。だが、個人が孤独に死に面する時期の長期化とともに、スピリチュアルな死生観も有力な選択肢として登場するかもしれない。ただ、スピリチュアルな死生観は、個人的確信に根差すので不安定であり、また実在論的な霊信仰が、フロイトや初期キューブラー＝ロスが指摘したように、死の否認に利用される可能性は開かれたままであることを付け加えておこう。

2008年1月13日 東大グローバルCOE冬季セミナー

20世紀心理学の死生観

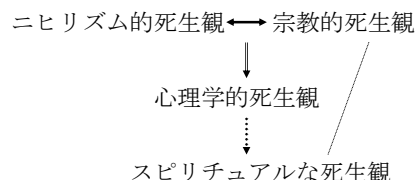
フロイトからキューブラー＝ロスまで

堀江宗正(聖心女子大学)

1

講義の目的

- 死と生をめぐる心理学的な思想を整理、論点を確認



2

扱う対象

- 心理学的な立場から宗教を対象化し、それを通じて宗教に代替するような思想を練り上げた著者たち。
- かつ死をめぐる心理的問題に言及。
- フロイト、ユング、フランク、キューブラー＝ロス、エリクソン、ヒルマン

3

フロイトの喪の仕事と死の欲動

- 生は死をはらむ。
- 生は喪失の連続。無常。
- しかし無意味ではない。
- 永遠ではないからこそ意味がある。
- 死を否認すると抑鬱などの症状に。悲しむこと(喪の仕事)がかえって対象の価値の認識につながる。

4

フロイト「無常ということ」(1916)

しばらく前に、私は、寡黙な友人と、若くて既に名の出た詩人といっしょに、花の咲き競う夏の風景を楽しみながら散歩したことがある。詩人は周囲の自然の美しさを感じ嘆きはしたものの、心からその美しさを味わい楽しんでいるのではなかった。彼が興ざめたのは、こうした美もすべて消滅すべき運命にあり、冬になれば消え去ってしまうのであって、またどんな人間の美しさも、人間が創造したり創造しうる美しく高貴なものも、決して例外ではないという考えであった。

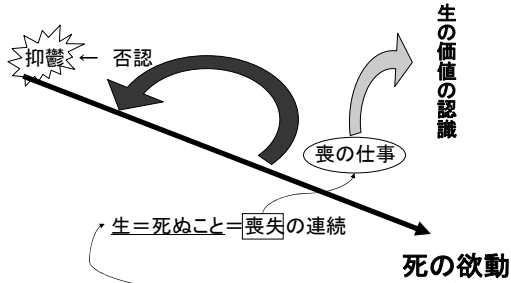
5

フロイト「無常ということ」(続き)

...あるものは、それがなくなるということによって、かえって...その価値を高められるのである。...いっさいの美しいもの、完全なるものの価値は、単にわれわれの感覚生活に対するそれらの意味によってのみ決定されるのであって、...絶対的時間の持続とは無関係なのである。...彼らに美しいものを味わえないようにしてしまったのは、喪失の悲しみに対する心理的な抵抗であったに違いない。...私がこの詩人とこんなことを語り合ったのは、第一次大戦の一年前の夏のことだった。

6

フロイトの死生観(概念図)



7

ユングにおける「死と再生」、臨死体験

- 生=個性化・自己実現のプロセス = 死と再生の繰り返し。
- 死は生の達成。個性化の最終段階。人類の集合的無意識に帰すること。
- 臨死体験を持ち、死後生の実在を匂わすが、最終的には死後生を心的現実として扱うという態度を崩さない。
- 死を無とすると、死への不安や恐怖が高まる。死と再生の宗教的・神話的イメージの助けを借りながら死に向かう。

8

ユング『ユング自伝(邦題)』(1961)

1944年の初め、私は心筋梗塞に続いて足を骨折するという災難に遭った。意識喪失のなかで譫妄状態になり、私は様々な幻を見た。...私は宇宙の高みに上っていると思っていた。はるか下には、青い光の輝くなかに地球の浮かんでいるのが見え、そこには紺碧の海といくつかの大陸が見えていた。...ほんの少し離れた空間に、隕石のような真っ黒の石塊が見えた。...私が岩の入り口に通じる階段へ近づいたときに、不思議なことが起こった。

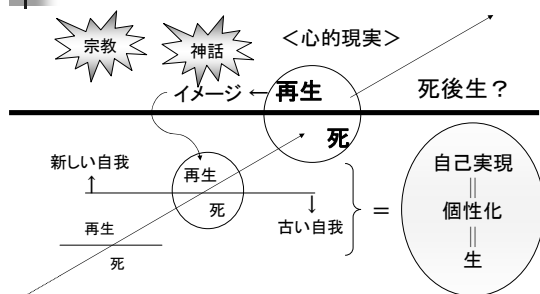
9

ユング『ユング自伝』(続き)

私はすべてが脱落していくのを感じた。私が目標としたもの、希望したもの、思考したもののすべて、また地上に存在するすべてのものが、走馬灯の絵のように私から消え去り離脱していった。この過程は極めて苦痛であった。しかし、残ったものもいくらかはあった。それはかつて、私が経験し、行為し、私のまわりで起こったことのすべてで、それらのすべてがまるで今私とともにあるような実感であった。...これこそが私なのだ。「私は存在したものの、成就したものの束である。」

10

ユングの死生観(概念図)



11

フロイトの強制収容所体験と生きる意味

- 収容所：生きる意味を問う→問われている = 生きる意味を示す責任。
- 生成としての生。沈殿する時間。
 - 何かになると同時にそれが残る。
- 死=生の完成
- 死後=精神的 [霊的] 人格が残る。死後生とは区別。物理的なものと無関係
- 死があるからこそ生の一瞬一瞬がかけがえのないものとなる。

12

フランク『夜と霧(邦題)』 (1947)

...一人の仲間が突然つぶやいた。「なあ君、もしわれわれの女房が今われわれを見たとしたら！彼女の収容所がもっとまじだったらいいんだけど。彼女が今のわれわれの状態を少しも知らないといいんだが。」すると私の前に、私の妻の姿がまざまざと見えたのである。...もはや何の言葉も語られなかった。しかし、われわれはそのとき、みなが自分の妻のことを考えているのが分かっていて。ときどき、私は空を見上げた。そこでは星の光が薄れて暗い雲の後ろから朝焼けが始まっていた。

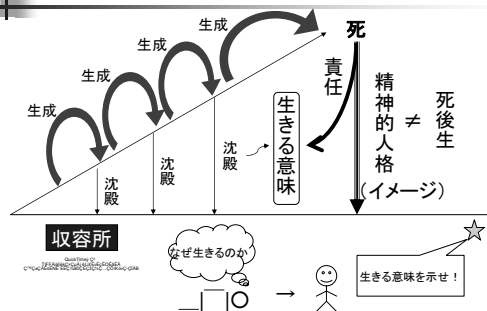
フランク『夜と霧』(続き)

...私は妻と語った。私は彼女が答えるのを聞き、彼女が微笑むのを見る。私は彼女の励まし勇気づけるまなざしを見る。そして、たとえそこにいなくても、彼女のまなざしは、今昇りつつある太陽よりももっと私を照らすのであった。...たえもはやこの地上に何も残ってなくても、人間は、瞬間であれ、愛する人間の姿に心の底深く身を捧げることによって幸福になりうるのだということが私に分かったのである。...そのとき、私はあることに気がついた。私は妻がまだ生きているかどうか知らないのだ！

フランク『夜と霧』(続き)

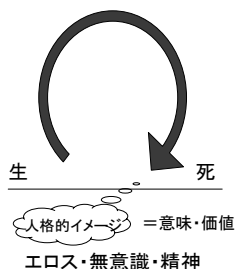
...愛は、ひとりの人間の身体的存在とは関係が薄く、愛する人間の精神的存在と深く関係している。彼女がここにいるということ、彼女の身体的存在、彼女が生存しているということは、もはや問題ではないのである... (...そして事実、妻はこのときには既に殺されていた[改訂版では削除]。)しかし、この瞬間にはどうでもよいことであった。

フランクの死生観(概念図)



心理学的死生観の特徴

- 死に向かう傾向性。死は生の完成。
- 死者の人格的イメージは心的現実として残る。
- 自我はエロス・無意識・精神の自己展開の運動のなかから生まれ、そこに帰る。
- 死は個人的自我にとって現実的だが、生はそれを超えた意味と価値を持つ。



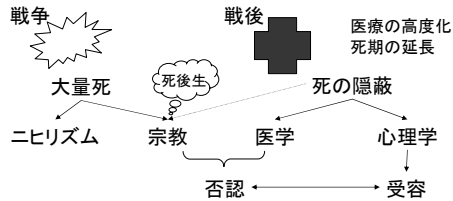
心理学的死生観の位置づけ

ニヒリズム的 死生観	死ねば無、生を無意味・無価値とする
心理学的死生観	死を直視してなお生の意味や価値を認める。
宗教的死生観	死後生を肯定し、死を否認

ニヒリズムと宗教のあいだを揺れ動く現代人にとって一つの有力な死生観
死と死後生に関するイメージの形成の援助
→死にまつわる悲しみ・不安・恐怖を癒す。18

第二次世界大戦後の展開

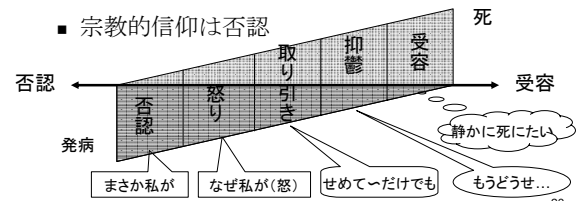
- 医療の高度化と死期の延長（高齢化）
→ニヒリズムより死の隠蔽や否認が問題に
→「受容／否認」の葛藤の可視化



19

初期キューブラー＝ロス 『死とその過程について』

- 死の過程の五段階説
否認・孤立、怒り、取り引き、抑鬱、受容
- 否認と受容の葛藤の分節化
- 宗教的信仰は否認



20

エリクソンの老年期

- 「統合／絶望・嫌悪」の葛藤→英知
- 「死に直面して生の全体性を受容／負の側面にとらわれて絶望するか」という葛藤
- → 英 知
「死そのものに向きあいながら、生そのものに向けられる、見識はある informed が執着のない detached 関心」

21

ヒルマンの「老い」

- 成長というよりは、よい意味でも悪い意味でもキャラクターの力の強化
- 統合というよりは分裂や矛盾も。心は複数のキャラクターによって構成。
- 神話的登場人物（キャラクター）が、われわれの性格（キャラクター）になり、死後、人類の神話的イメージに再び合流

22

戦後の心理学的死生観の特徴

- 老化、死への直面に伴う、負の心理的側面の問題、葛藤。
- （ヒルマンは成長概念を批判しているが、キャラクターの強化も広義の発達では？）
- 死に向かう心理を「最後の成長」としてとらえる。

23

「死ぬまで成長は続く」という考え方

- いずれ死によって否定されてしまう老人や病人の生の意味や価値
- But「発達」が続いているということを示す
- その場合の「発達」とは？
生の領域に属するような意味体系や価値観（たとえば病的か健康か、残された者が何を学べるかなど）に依拠
- あくまで死後生の信仰に依拠せず、生の意味や価値を救い出そうとする。

24

心理学的死生観の臨界点

- 不可知論的前提：「死後生」の存否には関与しない
- 宗教的信仰もニヒリズムも全面受容できない現代人に魅力ある死生観。
- しかし、死に直面する時期と葛藤の遷延
→個人化した「死後生」信仰への需要は高まるのでは？
→キューブラー＝ロスの死後生肯定を検討

25

キューブラー＝ロスの死後生肯定の背景

- 1 否認と受容のパラドクス
否認は受容の一種
受容は否認の一種
- 2 真正性の倫理
「否認／受容」は死後生観念の有無ではなく、感情の欺瞞や隠蔽の有無で決まる。
- 3 看取りと分かち合いの共同体の再構築
近代以前には死にゆく者は孤独でなく、死の否認や隔離はなかった

26

『死とその過程について』における宗教的信仰の扱い

- 「宗教的信仰＝死の否認」という断定
→事例では裏付けられない。
- インタビューにおける懐疑的姿勢
信仰があるから大丈夫という患者に
「本当に不安や恐怖がないか」問いたです
→共同研究者のチャブレンがフォロー。
- 「宗教的死生観＝否認」→自己欺瞞的でない信仰なら問題ない＝真正性の倫理

27

『死とその過程について』(1969)

<48歳プロテスタントのS夫人とのインタビュー>
患者 死ぬのは怖くありません。
医者 怖くない？
患者 はい。
医者 死ぬことは悪い意味を持っていませんか。
患者 そういう意味じゃないんです。普通なら誰だってできるだけ長生きしたいと思いますから。
医者 そうですね。
患者 でも、私は死ぬことが怖くないんです。
医者 死ぬことをどう考えているのでしょうか。

28

『死とその過程について』(続き)

牧師 私もそこが気になったんですが、人には実際色々困った問題があるという話以外に、私たちは何も話しあっていないんですね。この病気で死に至るしたらどうなるか、かんがえたことはありますか。...例のお友達とは話すとおっしゃいましたが。
患者 ええ。彼女とはそういうことも話します。
牧師 そういうことを私たちには話せますか。
患者 話すのは、そうですね、ちょっと難しいような。.....
牧師 ...前には結核を患い、同じ病気で娘さんを亡くされた。そういう経験は、あなたの人生観や宗教観にどういう影響を与えていますか。

29

『死とその過程について』(続き)

患者 神を身近なものにしてくれたと思います。
牧師 どんな風にでしょうか。神が助けてくださるというような感じということですか。
患者 そうです。神の御手にゆだねられているような感じですよ。病気が治って普通の生活を送れるとしたら、それは神のご意思でしょう。
牧師 他人に頼るのは難しいとおっしゃいましたね。でも、そのお友達にはとても救われる思いがするとも。神に頼ることは難しいですか。
患者 いいえ。
牧師 神はそのお友達のような存在なんでしょうか。
患者 そうですね。

30

セミナーの共同研究における宗教的伝統の再評価

- 宗教的伝統＝死を受容する共同体
- 現代はそれが壊れているという認識。
- 再 構 築
＝キューブラー＝ロスの治療実践。
- 「宗教＝死の否認」だけでなく「宗教＝死の受容」、大転換！
- (どちらにでもなりうる。晩年においても宗教が否認につながるという視点はある。)

31

キューブラー＝ロスの治療実践

- 死を前にした葛藤
＝人生全体にかかわる問題の表面化。
- 幼少期における「条件づけられた愛」が隠された憎悪を生む。
- 患者を「無条件の愛」で受容することで、患者のなかの愛の側面が活性化される。
- 患者の死を受容することが患者自身の死の受容につながる

32

臨死体験とキューブラー＝ロス自身の宗教体験

- 患者の臨死体験の報告。
- それを受容すること
→死後生の肯定への「回心」
- 死後生を認めようとしないう頑迷な態度こそが「否認」
- 数々の宗教体験

臨死体験の事例に遭遇、霊との遭遇、妖精・守護霊の写った写真、チャネラーとの交流、霊との接触、体外離脱体験、死後生＝霊信仰を広める使命の自覚

33

スピリチュアルな死生観の誕生？

- 不可知論から実在論へ
死後生をイメージとしてのみ活用するという態度の困難さ
- だが個人の内的確信の立場
霊信仰を患者に強制することは真正性の倫理と矛盾するはず
- 「スピリチュアル」の意味
 - 霊＝スピリットを中心概念とするという意味で
 - 教条主義に反対する個人的スピリチュアリティの立場に近いという意味で

34

『人生は廻る輪のように(邦題)』(1997)

死そのものは素晴らしい肯定的な経験だが、私のようにそれが引き延ばされた場合、死に至る過程は悪夢になる。...一九九七年一月、この本を書いている時点で、正直なところ、もう卒業したいと痛切に願っている。体力はすっかり衰え、絶えず痛みがあり、すべてを人に頼っている。「宇宙意識」の教えによって、辛辣で怒りっぽく病気を患痴る態度を捨て、この「いのちの終わり」に、ただ「イエス」といさえすれば、身体を離れ、もつとましな世界で、もつとましな暮らしができるようになることは分かっている。しかし、あまりにも頑固で反抗的な私は、まだこのような最後の教訓を学ばなければならない。すべての人と同じように。

35

『人生は廻る輪のように』(続き)

しかし、そのような苦しみのなかにあってもなお、私は安楽死装置を使うキヴォキアン医師のやり方には反対である。キヴォキアンは、苦痛だから、不快だからという理由だけで、安易に患者を安楽死に導いている。患者が卒業する前に最後の教訓を学ぶ機会を、自分が患者から奪っていることに気づいていないのだ。私は今、辛抱すること、従順になることを学んでいる。どんなに難しい教訓であろうと、創造主には計画があることを、私は知っている。蝶がサナギから飛翔していくように私が身体から離れるときを決めるのは、創造主である。そのことを私は知っている。いのちの唯一の目的は成長することにある。偶然というものはないのだ。

36

結論

- 心理学的死生観＝死を直視しつつ生の意味や価値を認め死と死後生のイメージを提供
→宗教的死生観(ここではキリスト教)もニヒリズム的死生観も全肯定できないような現代人にとって、はアピール。
- 個人が孤独に死に面する時期の長期化
→スピリチュアルな死生観も有力な選択肢。
- ただ、個人的確信に根差すので不安定。
- 実在論的な霊信仰が死の否認に利用される可能性は開かれたまま。

37

参考文献

- 本講義は以下の二つの論文にもとづいている。詳しい出典の注記はそれらを参照していただきたい。
 - 堀江宗正「心理学的死生観の問題構成——フロイト・ユング・フランクルの思想から」、『死生学研究』(2006年春号)、pp. 58-86。
 - 堀江宗正『心理学的死生観の臨界点——キューブラー＝ロスをめぐって』『死生学研究』(2006年秋号)、pp. 36-61。

38